

先週私たちは、ピリピで占いの霊につかれた若い女性から、悪霊を追い出したことがきっかけで、パウロとシラスが、彼女の主人たちに捕らえられ、むちで打たれ、そして牢に入れられたことを見ました。そのこと自体は、実に理不尽なことであったわけですが、でも神様は、そのような中でもすばらしいみわざを行われます。そこで主は看守とその家の者全部を救われるのです。実にそれは主のみわざといえますが、でも私たちは、そこで主がパウロとシラスを用いられたこと、つまり、不当な扱いを受ける中でも、主に信頼し、祈りと賛美をもって主に近づく彼らを、その救いのために用いられたことを覚えておきたいと思います。

さて夜が明け、釈放されたパウロとシラスは、ルデヤの家に行き、兄弟たちを励ましてから、次の町へと向かいます。🗺️前の地図を見て下さい。今日の箇所では、マケドニア地方の州都であったテサロニケ（ピリピの南西 160 キロ）と、そこから西に 80 キロのベレヤで行われたパウロたちの宣教について記されています。この二つの町の共通点、それは 1 節と 10 節からわかるように、ユダヤ人の会堂があったということです。パウロたちは、まず会堂に行き、みことばを語ります。

彼らが、それぞれの町にどのくらいの期間、滞在したかはわかりません。でも、最初のテサロニケでは、「三つの安息日にわたり」とありますから、最低三週間以上であったことは確かです。なかには、それが 4~6 ヶ月間であったらうという人もいますが、いずれにしろ長期間ではありませんでした。ただそこでもパウロたちの宣教を通して、救われる人々が起こされます。

まずテサロニケでは、4 節「彼らのうちの幾人かはよくわかって、パウロとシラスに従った。またほかに、神を敬うギリシヤ人が大ぜいおり、貴婦人たちも少なくなかった」。テサロニケでは、幾人かのユダヤ人と神を敬うギリシヤ人と貴婦人たちが大ぜい信仰に入りました。ではベレヤではどうだったかという、12 節「そのため、彼らのうちの多くの者が信仰に入った。その中にはギリシヤの貴婦人や男子も少なくなかった」。

「少なくなかった」ですから、それなりの数のギリシヤ人たちがそこで救われたということです。では、ユダヤ人たちは？という、「彼らのうちの多くの者」が信仰に入ったといえます。ベレヤでは、なぜテサロニケの「幾人か」とは違い、「多くの者」が信仰に入ったのでしょうか？そこに何か違いがあったからですか？

2-3 節「パウロはいつもしているように、会堂に入って行って、三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らと論じた。3 そして、キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して、『私があなたがたに伝えているこのイエスこそ、キリストなのです』と言った」。

これはテサロニケでのことですが、その背景が、同じユダヤ人の会堂であった、というところからして、パウロたちは、ベレヤでも同じようにみことばを語ったと思われる。彼らは、常に聖書に基づいてユダヤ人たちと論じたのです。そして、その内容は、キリストの受難と復活についてであり、パウロたちが宣べ伝えている主イエスこそ、キリストだというものでした。

ですから、語る側としてのパウロたちは、同じ聖書から、同じ内容について語ったと言えるでしょう。ということは、聞き手側のテサロニケのユダヤ人とベレヤのユダヤ人たちと間に、何らかの違いがあったのです。そして、その違いが 11 節に記されています。「このユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりにかどうかと毎日聖書を調べた」。

この「良い人たち」とは、口語と新共同では「素直」、また英語では“Noble”「気高い、高潔な」と訳されています。ベレヤのユダヤ人たちをして、彼らの素直さ、気高さというのは、どこに表れていたのでしょうか？それは神様のみことばに対する態度に、つまり、非常に熱心にみことばを聞くというところに出ていました。それゆえに、彼らは語られることが、はたしてそのとおりにかどうかと毎日聖書を調べたのです。それがあつての 12 節にこう続きます。「そのため、彼らのうちの多くの者が信仰に入った」。

当たり前のことを言いますが、みことばに対する態度、その熱心さは、信仰に大きな影響を与えます。熱心にみことばを聞くところから、ベレヤのユダヤ人たちの多くの者が信仰に入ったようにです。もちろん、このことは、聖書の背景をもたない人には当てはまりません。でも信仰が与えられた後は、すべての人に当てはまることです。なぜなら、「…信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによる」（ロマ 10:17）からです。では、どうですか？そのベレヤの人々のようにでなかったテサロニケのユダヤ人たちのみことばに対する態度はどうだったのでしょうか？

5-8 節「ところが、ねたみにかられたユダヤ人は、町のならず者をかり集め、暴動を起こして町を騒がせ、またヤソンの家を襲い、ふたりを人々の前に引き出そうとして捜した。6 しかし、見つからないので、ヤソンと兄弟たちの幾人かを、町の役人たちのところへひっぱって行き、大声でこう言った。『世界中を騒がせて来た者たちが、ここにも入り込んでいます。7 それをヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、イエスという別の王がいると言って、カイザルの詔勅にそむく行いをしているのです。』8 こうして、それを聞いた群衆と町の役人たちとを不安に陥れた。

テサロニケの多くのユダヤ人たちにとっては、パウロたちの語ることが、はたしてそのとおりにどうかということ、そこまで大切ではなかったようです。というのは、パウロたちの語りを聞き、信じて彼らに従う者たちを見て、彼らはねたみにかられたからです。つまり、彼らにとっては、聖書がどうというよりも、自分たちのこと、自分がどう考えるかといった方が大事なことでした。ですから、みことばの真実性よりも、ねたみという感情が勝つことで、彼らは人々を煽り、暴動を起こすという行動に出るのです。そして、パウロたちの滞在先と思われたヤソンの家を襲い、彼と幾人かの兄弟たちを町の役人たちの前に引き出して訴えました。

彼らの訴えをもう一度見みます。6 節後半から 7 節にかけて、「世界中を騒がせて来た者たちが、ここにも入り込んでいます。7 それをヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、イエスという別の王がいると言って、カイザルの詔勅にそむく行いをしているのです」。弟子たちを訴えた者たちは、このように主張したわけですが、では彼らはカイザル（ローマ皇帝）を主としてあがめていたのですか？表向きは、どうやらそうであったようです。もちろん、それは神としてではなく、王としてだと思いますが、でも際どいところでは

彼らは、パウロたちのことをこのように呼んでいます。「世界中を騒がせて来た者たち」と。このところは、英語では、「この世界をひっくり返した (Upside down) 者たち」といった表現が使われています。つまり、彼らは、主の弟子たちが、カイザル以外にイエスという王がいると言って、ローマの統治する世界をひっくり返そうとしていると主張したのです。皆さん、この訴えをどう思いますか？私はその通りだと思います。なぜなら、主イエスを王として迎える者の世界、つまり、その価値観は、全くひっくり返されてしまうからです。

主イエスを知らない人にとっては、この世がすべて、そして、その中心は自分自身と言えるでしょう。でも、主イエスを信じる者にとっては、この世はもはやすべてではなくなります。なぜなら、主イエスは、今の世ではなく、次に来る世（天国）での永遠を約束しておられるからです。ですから、その天の御国を待ち望む者は、それを恵みをもって治められる主イエスを中心に生きるようになるのです。そのようにして世界はひっくり返され、その影響は、主を信じる者自身だけに留まらず、まわりにまで及んでいき、家族や知人を超え、社会にまでも広がっていきます。それが福音の力です。

神様の選びの民であるユダヤ人たちは、約束のみことばに従って、皆がこの主を待ち望んでいるはずでした。ところが、主を受け入れない者たちは、自分自身が自分の王となることで、その自分の世界がひっくり返されることを拒んだのです。彼らは、表向きは、自分たちの王はカイザルと言っていたことでしょう。でも、その心においては、自分がその心の王座を占めていたのです。それゆえに、それが神様であろうが、他の何ものであろうが、その世界を騒がせる者には、何が何でも対抗しました。

ただ、彼ら自身が、信じないだけならまだ良いのですが、彼らは他の人々も主を信じさせないようにするため、パウロたちや他の弟子たちを迫害するのです。でも、パウロたちは、その迫害から逃れます。それは迫害者たちを恐れたからではありません。主の福音が他の町でも宣べ伝えられるためです。そのようにして、ここでパウロは一旦、シラスとテモテと別行動を取ります。今開きませんが、14-15 節に書かれてある通りです。

いかがでしょうか？皆さん、あなたはご自分のことをベレヤの人々のようだと言われますか？つまり、あなたは主のみことばを非常に熱心に聞き、毎日聖書を調べていますか？それとも、テサロニケの信じないユダヤ人たちのようだと言われますか？みことばに聞くよりも、自分の考えや悟りに頼って生きておられるでしょうか？それゆえに、一応、主への信仰は告白しながらも、でも心の中では、自分の世界、その価値観が、主イエスによって変えられることを拒んだり、それを望まないということはないですか？

私たちは、他の人のうちにある自己中心性、頑なさ、傲慢さといったものには簡単に気がつきます。でも、いざ自分のこととなると、なかなかそれが見えないのです。それゆえに、自分を正しい者、大丈夫な者であるかのように考えてしまいます。でも、主イエスなしに、大丈夫な人などひとりもいません。この方のみことばを聞くことなしに、神様に喜ばれる歩みをする人などいないのです。

だから、私たちの方からではなく、主イエスの方から私たちのもとに来て下さいました。本当は、私たちが受けるはずの罪に対する神のさばきを、主が代わりに受けて下さるためです。そこに、キリストが苦しみを受けると聖書に預言されていた理由があります。それは実に、自分の罪を自分で償えない私たちのため、罪のないお方がご自身のいのちをもって償って（贖って）下さるためでした。それだけではありません。キリストは、死者の中からよみがえらなければならなかったわけですが、それはご自分が死者の中からのよみがえりの初穂となられることで、ご自分を信じる者にも、復活のいのちを与えて下さるためです。主イエスは、そのようにして十字架の死を遂げ、死者の中からよみがえられることで、ご自分がキリストであることを証されました。

このことは、ピリピで救われたルデヤのように、主が私たちの心を開き、みことばに心を留めるようにして下さることがなければ、到底理解のできないものです。でもそうであるゆえに、今そのことをわかるようにされているという事実があるなら、それは主のあわれみ、恵みにあずかっている証拠といえます。あなたが主に対して熱心であるからではなく、主があなたに対して熱心で、このすばらしい救いをあなたに与え、それを完成することを望んでいて下さるからです。

ですから、私たちはみことばを通して日々この方に聞くのです。それによって、主とその救いのすばらしさをさらに知るためです。そこに目が開かれるなら、主への信仰、信頼は、私たちのうちで大きくなっていきます。そうになると、私たちはこの王なる主をあがめずにはおられなくなる。主と主のすばらしさをほめたたえずにはおられなくなります。主がそのようにしてご自身を証されるからです。みことばを通して、主に聞くならば、主はあなたに語って下さいます。そして、ご自身の平安をもって満たして下さるのです。主イエスに聞くではありませんか。